

潜伏・かくれキリシタンの信仰の書

— 『天地始之事』の伝本調査と再検討

Senpuku and Kakure Kirishitan's Book of Faith:
Manuscript Investigation and Reexamination of *Tenchi Hajimari no Koto*

呂 雅瓊*
Yaqiong Lyu

『天地始之事』は長崎外海・五島地方の潜伏・かくれキリシタンに伝わるその信仰伝承に関する書物である。キリスト教の救済神話を基調とし、日本の神道・仏教・民間伝承を巧みに記述している本書は、潜伏・かくれキリシタン信仰の実態を表す重要な資料である。

本書の存在はパリ外国宣教会の宣教師、プティジャンによって1865年に初めて報告された。プティジャンは本書に倣って『聖教初学要理』第一巻を編纂し、潜伏キリシタンに配って写させたが、本書の内容自体を公表しなかった¹。1930年代、かくれキリシタン研究の第一人者たる田北耕也は本書の伝本を見出し、校訂本文を刊行した。その画期的な業績に触発され、学際的なアプローチを用いた多彩的な関連研究、ドイツ語訳、スペイン語訳、英語訳が現れた。しかし、本書の伝本整理といった基礎的研究はまだ不十分であり、その成立と受容につ

いても不明なことが甚だ多い。こうした研究状況に鑑みて、本稿は『天地始之事』の伝本を整理し、本書の成立と享受の位相を究明することを当面の課題とする。

本題に入る前に、「キリシタン」「潜伏キリシタン」「かくれキリシタン」といった専門用語を定義しておきたい。本書の成立と変容は宣教師の関与の有無に大きく影響されたことを考え、岡田章雄によるキリシタン史の区分(1984:427-8)を踏まえ、本稿では「キリシタン」をキリスト教が日本に伝わった1549年から、キリシタン禁制により最後の一人の宣教師も殉教した1644年までの信者、「潜伏キリシタン」を1644年から信者発見の1865年の信者、「かくれキリシタン」を1865年以降もキリスト教諸派に合流せず、父祖から継承した潜伏信仰をそのまま貫く信者と定義する。

* 東京大学大学院学際情報学府博士課程

キーワード：潜伏キリシタン、かくれキリシタン、キリスト教、天地始之事、長崎、聖書

1. 伝本の状況

先行研究を踏まえた資料調査により、『天地始之事』伝本 15 点の存在が判明した。各伝本の関連情報を表 1 にまとめた。

表 1 『天地始之事』伝本情報

番号	名称 ²	書写者 (発見時の所持者)	書写年次	体裁	発見地	現在の所蔵者
1	下村本	不明 (下村善三郎)	文政年間 (1818-30) と推定	美濃紙四折	三重村	天理図書館.天理2007調査,「原本未整理」.
2	畑田本	不明 (畑田秀穂)	1827	和紙四折横綴 22cm×15cm	五島 奈留島	不明.天理2007調査, 「原本未所蔵」.
3	若松町本	不明	1829	不明	上五島若松町	個人
4	下川本	下川某? (浦岡倉松)	明治時代 (1868-1912) の中頃か	半紙半折	長崎市	天理図書館
5	村上本	村上忠蔵 (村上近七)	明治時代か 大正時代 (1912-26)	和紙二折 29cm×12cm 28枚、56丁 古い竹筒に 収納されていた	黒崎	村上家 (村上近七→ 村上茂→村上茂則)
6	山口本	不明 (山口慶蔵)	1904	半紙半折	五島福江島 観音平	天理図書館
7	松尾与太本	不明 (松尾与太)	1907	不明	黒崎村	不明.天理図書館か.
8	久松本	久松助右衛門 (久松助右衛門 ³)	1919	小学生用 ザラ紙ノート 19.5cm×14cm	黒崎村	天理図書館
9	松下本	松下清蔵	1922	不明	下黒崎	個人
10	松尾久市本A	松尾久市 (松崎源右衛門)	1922	小学生用 ザラ紙ノート 19.5cm×14cm	三重村	天理図書館
11	松尾久市本B	松尾久市 (久松助エ衛門)	1926	綴方草稿帳 20cm×14cm	黒崎村	天理図書館
12	道脇本	不明 (道脇増太郎)	不明	美濃紙半折	五島奈留島	天理図書館
13	松尾弥蔵本	松尾弥蔵?	不明	不明	不明	個人
14	松崎本	不明(松崎玄(源) 右衛門本)	不明	不明	畝刈垣内	個人
15	松川本	不明	不明	不明	不明	個人

※1 表1は主に田北 (1954,1970)、片岡 (1967,1972)、ムンシ (2012)、宮崎 (2014)、大石 (2018)、児島 (2018)、西田 (2018)、石田他 (2019) を踏まえて作成したものである。

※2 基本的に書写者名で諸本を命名するが、書写者が不明な場合、所持者名または発見地名で命名する。また、書写年次に基づいて諸本を配列するが、書写年次が不明な場合、最初に報告された年を基準としてその順番を決めて並べる。

※3 伝本5は1976年にカトリック信者でキリシタン史の研究者である田中用次郎によって写されており、この転写本は結城了悟 (1994) に翻刻されている。

表1を通覧してわかるように、諸本の体裁や書写年次が様々である。発見地は主に長崎・外海地方か五島列島に集中する。ヨハネス・ラウレス（1957:116）は生月島版『天地始之事』に言及したが、先行研究や稿者の所見では、そのような伝本は存在しない。

書写者と所持者の多くは潜伏・かくれキリシタンの中の「帳方」（宗教上の最高権威者）であるか、教養があり、人望のある信者であり、コミュニティの中で重要な位置を占める人物である。

具体的に示せば、伝本1の所持者である下村善三郎は三重村・東檜山集落の帳方で、伝本5の書写者と所持者は全て黒崎村・迫集落の帳方である。伝本8は黒崎村・永田集落の帳方を務める久松助右衛門によって書写され、所持されており、久松は別に伝本11も持っていた。伝本10、14の所持者の松崎源右衛門は三重村・畝刈垣内集落の帳方であり、伝本12の所持者の道脇増太郎は五島奈留島・永這の帳方である。伝本13の所持者の松尾弥蔵も帳方であるが、その組織の所在については不明である（田北 1954:14-7,25,31,178、吉松編 1976:80、ムンシ 2012:63、大石 2018:226）。

そして信者については、伝本10、11の書写者である松尾久市は黒崎村・松本集落の信者であり、田北の報告によれば読み書き能力が高く博識で、親戚や近隣からの信頼も篤い人物である。伝本6の所持者である山口慶蔵については情報が少なく、五島観音平のかくれキリシタンであることしか知られていない（田北 1954:23,33）。

以上の伝本のほかに、カトリックの司祭や信

者が持つ伝本もある。これは、かくれキリシタンをカトリックに合流させようとしたカトリック側の努力により、一部のかくれキリシタンはカトリックに入信し、その所持した伝本をカトリックの司祭や信者に譲った結果である。伝本2と伝本4はそれである。伝本2の所持者の畑田秀穂は浦上小教区の助任司祭であり、伝本4の所持者の浦岡倉松は大浦教会の信者である（田北 1954:14,59-60）。

諸本情報から、『天地始之事』の伝承と流布上の特徴2点が指摘できる。1点目は、成立と伝承の経緯が特に明確な伝本5から看取される、信仰の指導者が所持し、その家系で代々受け継がれるという特徴である。

2点目は、潜伏・かくれキリシタン内部には複数の帳（小集団）が存在するが、本書が帳を跨いで流布した点である。これは、松尾久市に関係する複数の伝本の存在から示されたことである。既に述べたように、松尾久市によって書写された伝本10、11はそれぞれ違う帳の帳方によって所持されていた。また、松尾久市と伝本1の所持者である下村善三郎は従兄弟同士であり、松尾久市は同じく黒崎村・松本集落出身で伝本7を所持していた松尾与太とも緊密な関係にあり、祈祷書を書写して与太に与えたことがある（田北 1954:36,48）。

なお、伝本6、7にはその依拠する原本を示す奥書または識語が見られ、それによれば、五島で発見された伝本6は「黒崎の元本を写す」もので、黒崎村の伝本7は「黒崎の元本や三重田の本を見せて写す」ものである。今回調査できた諸本のうちに「黒崎の元本」「三重田の本」と思しき伝本がないと思われるが、ここからも

本書の流布上の2点目の特徴が確認できるだろう。ちなみに伝本10、11にも識語があり、主にその書写年次、書写者または所持者を示しており、関連情報は表1に整理した。

諸本の現在の所蔵について、天理大学附属図書館が伝本9点を所蔵しているとされるが（小島1967:16、田北1968:33-40、石田他2019:7-9）、

2. 諸本の検討

表1に掲載した諸本の原本を見ることが難しいものの、15点の写本のうち、資料の体裁や書風、表記などを伝える影印がある伝本が7点（伝本1、2、6、7、10、11、12）⁶、翻刻された伝本が3点（伝本1、5、11（Bohner 1938:500-14、

稿者が同館で資料調査を行なった2023年9月時点で、関連資料が未整理のままで、伝本1と伝本2の複製写真帳のみが公開されている⁴。なお、伝本2の写真帳に挟まれている書誌情報カードによると、伝本2の原本が行方不明になっている⁵。そのほか、6点は個人蔵である。

部分的な翻刻))、影印も翻刻もされていない伝本が7点（伝本3、4、8、9、13、14、15）ある。影印も翻刻もなく、実物資料の閲覧も叶わない伝本を除き、諸本の内容を次頁の表2に整理した。

2.1 諸本の内容

表2に示されたように、①～⑮は諸本共通の内容であり、本書の中核的な部分である。その書名も最初の節「天地始之事」に拠るが、伝本によって書名がやや異なる。

①～②は旧約聖書、③～⑭は新約聖書や奇跡譚に由来するものである。全体的な流れとしてキリスト教の救済史観であるが、各物語の展開や語りの所々に嵌め込まれた教義が、カトリック教会が定めた「正統信仰」とはかなりの距離がある。この部分に関しては研究が少なくない（紙谷1986; Turnbull 1996 など）。

⑮は煉獄（ふるかとうりや）に関する一節である。二人の親友が、先に死んだ者は必ず戻って、生き残った者に来世のことを語ると約束した。先に死んだ者が戻って、死後は煉獄で苦しめられ続けていたことを告げた。生き残った者

は煉獄の火を乞い、生きている間に自分の罪を焼き滅ぼすことを願う。死んだ者からもらった煉獄の火は燃えてからすぐに消え、生き残った者は天国（ばらいそ）に昇った。物語の最後、昇天した者が「三とうす様」であると、主人公の一人の正体が示されている。先に死んで煉獄で苦しんでいる者については諸本の記述が大きく相違するが、次節で詳しく検討したい。

⑯、⑰、⑱は伝本7にしか見出されない信仰の実践に関わる部分で、信仰に関する物語である他の部分と性格が異なり、通常「祈祷書」として独立する（田北1954:48-50）が、書写者は、タイトルと内容との一致性よりも使い勝手を重視し、行事などで参照が必要な情報をもこの「天地始り」と題する冊子に書き入れたりしている。

表2 『天地始之事』諸本内容

内容	伝本番号	1	2	4	5	6	7	8	10	11	12
①天地・人間の創造、天使・人間の墮落、人間の追放		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
②墮落した天使の追放、下界における人間の繁衍と悪化、大洪水による世の滅亡、ぱっぱまるじ一家の生き残り		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
③さんじゅわんの誕生、 <u>ろそんの国における帝王さんぜんぜ十すの貧女丸やへの求婚の失敗</u> 、六月に雪を降らせた <u>丸やの靈験談</u>		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
④ <u>丸やの上天とでうすへの謁見</u> 、 <u>受胎告知</u> 、 <u>丸やの懐妊</u> 、 <u>いざべるなの丸やへの訪問</u>		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑤ <u>丸やの両親による丸やの追い出し</u> 、御身の誕生と割礼、三王の御身への礼拝、 <u>べれん国の帝王よろうてつによる御身の殺害計画</u> 、 <u>丸やと御身の逃亡</u> 、御身の受洗と学問研鑽		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑥御身と学匠がく十らんととの問答、 <u>がく十らんと</u> とその門弟の御身への弟子入り		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑦ <u>よろうてつによる御身の詮議</u> 、 <u>幼児虐殺</u> 、 <u>十だつ</u> の裏切りと自殺		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑧ <u>よろうてつによる御身の捕縛</u>		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑨御身の受難		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑩盲目が賞金のために御身を殺すこと、御身の死と埋葬		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑪御身の大地の底への降下と <u>でうす</u> の右の座への高举、御身の弟子と丸やの上天		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑫御身の助かり、 <u>丸やとぜ十すとの結婚</u>		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑬三みざり、三ぺいとろ、 <u>三ばうろに役割が与えられること</u>		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑭世界の終末、 <u>でうすによる人間の審判</u>		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑮ <u>ふるかとうりやを経て天の道を得るという来世の事</u>		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑯ <u>祈祷文四種（おみきをいただく時の祈り、食前の祈り、十字架のしるし、聖人の取次を願う祈り）</u>		×	×	×	×	×	○	×	×	×	×
⑰御初穂の上げ方		×	×	×	×	×	○	×	×	×	×
⑱後悔の祈り		×	×	×	×	×	○	×	×	×	×
⑲妊娠を夫に知らせない罪、三十三のミサの功德		×	×	×	×	×	○	×	○	×	×
⑳諸聖人それぞれの役割		×	×	×	×	×	○	×	×	×	×
㉑ <u>三じわんとバスチャンの行実</u>		×	×	×	×	×	×	×	×	○	×

※1 各節のタイトルは必ずしもその節の内容を正確に反映しておらず、かつ諸本の同節のタイトルが一致しないため、表2に掲げた内容は稿者が各節の内容を踏まえて整理したものである。なお、平仮名で表記される外来語などに下線を引いた。

※2 伝本4、8は田北（1954:79-82）によってその構成を確認した。しかし、田北による校訂本文は底本（伝本1）と対校本（伝本2、4、6、8、10、11、12）との相違点を全て示していないため、諸本の具体像を分析する際に伝本4、8を分析の対象外とする。

※3 片岡（1972:1013）によれば、伝本5の巻末に「ヒザマツキノウラツ所」もある。

なお、⑲は伝本7、10に限って見られ、前半は妊娠を夫に知らせない罪で、後半は三十三のミサの功德についてである。話の中に申し子、丑の刻参り、天狗、血の池など、長崎の民間伝承に多見される要素が散りばめられている。書

き出しや語りは⑮と類似しているが、用語が比較的新しい。⑳は⑬と重複する内容を持つ部分である。伝本11だけが持つ㉑は海外地方に伝わる南蛮船の船長であって、宣教活動も行ったサン・ジワンとその日本人弟子のバスチャンの

行実を綴っており、これについても次節で述べる。

2.2 諸本の分類

諸本の叙述が大きく相違する⑮によって諸本を分類することが可能であろうが、その前にまずは先行研究による分類を確認しておきたい。

管見によれば、田北によって発見された九写本（伝本 1、2、4、6、7、8、10、11、12）を分類した小島幸枝（1969）は唯一諸本の分類を試みた研究である。氏が提示した系図については、図 1 を参照されたい。この系図を引用する際に、表 1 に従って諸本を命名し直したが、それ以外は全て小島（1969:72）によるものである。

図 1 に見える原話および原本の問題については本稿 3.1 で検討するが、ここではまず諸本の関係に注目してみたい。図にある A、b、b'、b''、b'''、c、c' について小島は説明しておらず、諸本の分類の基準についても「書写年次と識語、文字表記と文体、写本の発見地」とあるのみで、分類の過程を示していない。『天地始之事』を検討する氏の別の論考（小島 1966,1967）も合わせて確認したが、関連説明が見当たらない。

図 1 とともに、小島は「校合の面から推すと、写本は二系統（五島系、黒崎系）に分かれる」と指摘した。この点についても、具体的な解説がなされていない。こうした分類は図 1 にも反映されていると思われ、五島で発見された伝本 2、12 は他の伝本と違い、未知の c の系譜を引く伝本であるとされている。また、伝本 6 も五島で発見されたものであるが、その識語（「黒崎の元本を写す」、本稿 1 参照）に基づき、黒崎系に分類されただろう。

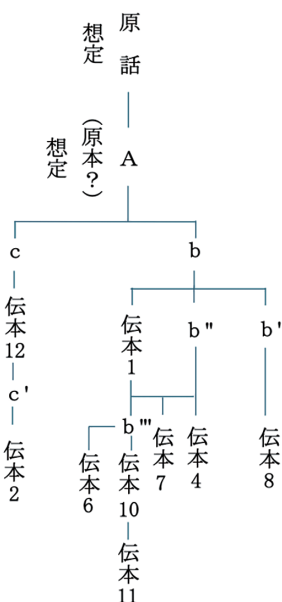


図 1 小島氏による諸本系図

説明の欠如により、以上の系図と分類を明らかにした過程に遡って、小島による分類を検証できないが、このような既存の分類を念頭に置きつつ、本書の⑮に注目して、諸本の関係を確認してみたい。

⑮の最後にある煉獄で苦しむ者の身分について、伝本 1、2、5、6、12 は、その名前は不明なために略している。これに対して、伝本 7 は「今一人の御方の御名明ならざる故、略する物なり」とあるが、その「の御名明ならざる故略する物なり」に抹消線を引き、隣に「は三じわん様と云ふ事なり」と書き換えている。伝本 10 では明確に「今一人のおん方ハ三じわん様と申奉るなり」と記されている。なお、伝本 11 は「今一人のおん方は明ならざるゆえ略するものなり」とあり、行を改めて「三じわん様と申すものもあります」と述べ、続けて⑳を

語る。

②に記載されている「三じわん」、すなわち「サン・ジワン」は、本来南蛮船の船長であり、日本人伝道師のバスチャンにキリシタン暦の繰り方を伝授し、神通力を有していた人物である。岡美穂子（2014:847）が指摘する別の説によると、サン・ジワンは南蛮人の宣教師であり、外海で潜伏している間に病没したとされている。同氏は、このように複数の異なる伝承を持つサン・ジワンは、かつて外海で活躍していた複数の宣教師の事跡を整合して形成した人物像であろうとし、その形成に関係したと思われる宣教師三人を挙げている。その三人はいずれも外海地方で隠れ住んで巡回宣教していた人物であり、それで外海地方のキリシタンの記憶に残されただろうという。

ここで特に注目したいのは、伝本 11 のみに記載される②は、表記や語彙、語順に若干の違いが見られるものの、浦川和三郎（1979:303-10）が筆録した外海地方に伝わったサン・ジワンとその弟子に関する伝承と同文が極めて多いことである。

伝本 11 の原本を見れば、②は他の節と比較して書風は同一であるが、字高、字数、行数が異なり、文字がぎっしり紙面を埋めている。用語の面でも、この部分は漢語（訣別、礼拝）や近代的な用語（信者、旧信者、十字架など）を散りばめており、主に和語やキリシタン用語を使用するほかの節と違う。以上を考えれば、この伝本の書写者の松尾久市は浦川論を参照して、②を補入したことが明らかである。

小島（1967:4）は、伝本 10、11 に「かなり手が加わったとみてよいであろう。しかし、そ

の修正箇所は語彙、語法の細微な部分であって、内容の本質を変えるまでに至っていない」とも指摘したが、サン・ジワン伝説の付加については言及していない。

以上から、キリシタン時代に外海で活躍していた宣教師の事跡は伝承となり、潜伏キリシタンを経て、かくれキリシタンに継承されていくが、その過程に研究者が関与することが示される。かくれキリシタンは、研究者によって整理されたサン・ジワン伝説を吸収し、『天地始之事』に書き入れることで、本書に示されたかくれキリシタンの信仰世界を広げ、信仰体系を補完したのである。

この過程で、伝本 10、11 の書写者である松尾久市といった存在が特に重要に見えるが、このようなかくれキリシタンによる創作は一人の手によって、一つの写本で完成されたものではない。伝本 7、10 は少しずつ⑤の記述を書き改め、新たな伝承を付け加える可能性を生み出している。そして伝本 11 ではその可能性を現実化し、⑤の展開を踏まえて、②のサン・ジワンの伝承を付加した。かくれキリシタンが信仰伝承を受け継ぐ中で、『天地始之事』に見える信仰伝承の増幅が実現したのである。

ただ、こうした内容の付加は、かくれキリシタンによる全ての写本に見られるわけではない。既に述べたように、伝本 5、6 もかくれキリシタンによる写本であるが、この二つの写本には、伝本 7、10、11 に確認できた内容の「変異」が見られない。つまり、一口にかくれキリシタンと言っても、信仰伝承の面から見れば、その実態はより複雑である。

以上の分析から、伝本 7、10、11 を他の伝本

と区別して捉える必要性が示されている。ここでは伝本 1、2、5、6、12 を A 系統、伝本 7、

2.3 分類の検証

『天地始之事』における全体的構成と一部の伝本における物語の付加を根拠に、諸本を二つの系統に分類したが、この分類の妥当性をさらに検証してみたい。

分析の第一の手がかりとして、『天地始之事』は①②に亘る、天地の創造とアダム一家の話である。この部分の梗概については、神（デウス）が天地万物を創造し、創造されたアダム（アダン）とイブ（エワ）が結ばれ、チコロ、タンロウといった男女の子を儲けた。そこで、天使（アンジヨ）の司であるルキフェル（ジュスヘル）が傲慢になり、神の代わりにルキフェルを拝むと良いと天使と人間を唆した。人間はルキフェルを拝んだにもかかわらず、神は人間を許した。その後、ルキフェルは人間に禁断の果実を食べよと勧め、人間もその勧めに応じてその果実を食べた。神はルキフェルと人間を天国（パライズ）から追放し、それぞれに処罰を与えた。下界に追放された後、チコロとタンロウは夫婦となり、この二人から人間が繁栄した。

この部分の語りを分析すれば、B 系統諸本には A 系統に見られない物語の具体的な展開、登場人物の心理描写や会話が多く見られ、共通の展開においても両系統の語りの相違が認められる。

具体的に、A 系統にはなく、B 系統には見られる展開として、(1) 寂しいと思い、人間を作ったという神の思惑、(2) 神が人間を作る具体的な過程、(3) アダムが禁断の果実を食べる前の

10、11 を B 系統とする。

悲嘆、(4) チコロとタンロウは下界で探し合っ
てようやく再会できたという展開が挙げられる。

両系統共通の説話の相違点に関しては、キリスト教で神の被造物と考えられる天使は、A 系統諸本では「召し寄せ」られた存在であるのに対して、B 系統では「(神が) できる」存在であるとされる。なお、イブの結末についても両系統は著しく異なる。A 系統では、神はイブに中天の犬となれと命じ、冷酷な仕打ちを受けさせたが、B 系統では、神はイブに祈りの文言を教えてイブを救いたかったが、イブは祈りを一回も唱えず、恐ろしい容姿となってしまう、神はそれを見兼ねてイブを地獄に落とし、世の終末の時に救うと約束した。

以上から見れば、A、B 両系統といった分類は妥当であろう。ただ、本稿 2.2 で論じたように B 系統にはかくれキリシタンによる 20 世紀以降の付加が見られるからといって、A 系統に比べて B 系統の独特な記述は全て最近の創作であると断定すべきではない。その根拠は、B 系統の伝本 10、11 のみに確認できた一部の記述は、「肥前国浦上村百姓共異宗信仰いたし候一件仕置奉伺候書付」(1857) に類似した文言が見出されることにある。

この史料は浦上三番崩れ(1856)の際の調書であり、浦上村百姓による「異宗」活動を詳細に記載しており、この異宗の信仰をめぐる物語についても触れている。それによれば、村民は

先祖伝来の「切支丹縁起様の書」を提出したというが、片岡弥吉（1972:855）は、この書は『天地始之事』ではないかと推測する。また、中村博武（2000:182）は同史料に『天地始之事』からの引用があると言及したが、具体的な引用箇所を示していない。

この調書に記された物語に、本尊のマリア（ハントマルヤ）による世界の創造、八石の田歌の始まり、イエス（リウス）の誕生と受難が見られる。その世界の創造の部分は、『天地始之事』の①②に対応する。そこには「パライソと申所は十万里四方□た一面にて」とあるが、B系統の伝本10、11のみにも「十万のパライソ、此所十万里四方びた一面」とあり、一致する文言が確認される。

明らかな20世紀以降の付加を除き、B系統独自の記述は、A系統が成立した後、1856年までに新たに形成した記述であるか。あるいは、A系統が保存していないより古い伝承であるか。諸々の可能性が考えられるが、史料の限界により現段階では判断しかねる。注意すべきは、B系統には潜伏キリシタンからの伝承とかくれキリシタンの創作が複雑に混じり合っている点である。

3. 『天地始之事』の成立と伝承

現在知られている『天地始之事』諸本情報と稿者による分類を踏まえ、先行研究を顧みつ

3.1 原本の成立

出典が不明な⑮と日本で形成した⑲⑳を除き、『天地始之事』に収録された説話は、キリ

ここで改めて小島による分類を顧みたい。今回はその系図の一部しか検証できないが、図1によれば、伝本7（B系統の最古の写本）は伝本1（A系統の最古の写本）と未知の伝本b'との融合の結果である。一方で、伝本1は伝本b''を経て、B系統の伝本10、11となった。しかし、伝本7と伝本1との相違は伝本b'によるものとすれば、伝本7に類似した内容を多く持つ伝本10、11も、理論上は伝本1の系譜を引くb''より、伝本b'または伝本7と何らかの関連性があると思われるが、図1にはそのように反映されていない。

また、写本の発見地に基づく「五島系」「黒崎系」といった分類については、今回の分析対象である①②⑮からすれば、五島系に分類された伝本2、12には独立した系統をなすほどの個性的な記述が見られなかった。

小島による分類に対する更なる検証は、同氏が分析した伝本をすべて把握した上、諸本の地理的な関係性や、本書の全文に対する精細な分析が必要である。紙幅の制限により、今回は検証できたA、B両系統といった分類を生かし、検討を続けたい。

つ、本書の成立と伝承に関わる諸問題を考えてみたい。

シタンの時代に宣教師によって日本に伝わったものである。そうすると、これらの説話を網羅

する原本は存在するのだろうか。もし存在すれば、この原本はいつ成立したのか。

小島（1967:3）は本書の写本の関係性を考える際に、諸本の源となる「原本」を想定したが、この原本は必ずしも存在せず、写本なしの原話のみが存在する可能性もあるとした。

また同氏は、別の論考（1969:79-80）で、早くも16世紀後半頃に成立された原話は、禁教政策が過酷になり、宣教師たちが日本から全くいなくなった17世紀後半の頃に定文化されて「原写本」となったとし、その間の約1世紀の期間に、分析対象の九写本に見える多くの誤字と宛字、仏教に対する理解の不足、外来語の意味の曲解、表現と内容における原話からの乖離の原因を探る。しかし、同論に掲載される系図（図1参照）を見れば、「原本」の隣に「想定」と付記している。「原写本」「原本」といった二つの用語について小島氏は説明していないが、文脈からすると両方とも「原話を最初に文字化し、諸本の元となった写本」との意味で用いられていると思われる。

3.2 本書の継承と流布

本書の原本の成立時期は不明であるが、原本が成立する前にも、成立した後にも、口承・書承されていたと思われる。確かに宮崎（1996:74）も触れたように、潜伏時代に信仰文書を所持することは危険であるが、浦上一番崩れや三番崩れの際に信者から信仰文書が没収されたことがあるのを考えれば、たとえ現存諸本のようなまとまった写本を所持していなくても、本書に収録された一部の物語または物語の断片を記載した文書を密かに持っていた可能性があろう。

一方、宮崎賢太郎（1996:74,77-9）は、迫害が厳しかった17世紀に『天地始之事』を発見しやすい文書の形で伝えることの危険性を指摘し、その原話は口承されていたとし、正当な教義が忘却されかけており、伝承が希薄化しつつある18世紀末に本書はようやく「創作」されたとする。本書の「変容度」を考慮しても、「潜伏時代に入って半世紀ほどでこのような変容をきたすとは思われないので、（本書の創作は引用者補）17世紀にさかのぼることは考えられない」とする。

以上の二つの説の他、田北（1959:396）は本書の「成立は18世紀の中頃と推定され、遅くも19世紀初頭にはだれかが書き下ろし」とするが、判断の根拠を明示していない⁷。

先学たちの論考は、『天地始之事』が原話から原本へといった過程を辿ったというところで共通するが、原本の成立時期の部分では齟齬する。この問題については、現時点では検討する材料が揃っておらず、判断を保留するしかない。

口承の主体はおそらく信仰の指導者であったと思われる。田北が調査を行った1930年代、下黒崎の「紋助爺」という老人は本書の内容を全部暗唱できたが（1954:77）、紋助爺の信仰集団における役割などについては不明である。書承の面では、現存諸本を見れば、本稿1で述べたように、書物自体は信仰の指導者か有力な信者の手にあり、「むやみに貸さ」ない（伝本11の識語）のであるが、写本が写し直されており、書承され続けている。

『天地始之事』の口承・書承は指導者や一部の信者によって行われたと思われるが、そこに収録された諸々の信仰物語は集会における講釈を通して一般信者に共有されていたと思われる。その受容の実態は、内外の記録によって証左される。例えば、前出の浦上三番崩れの調書によれば、指導者（惣頭）はその家で月々開催される「茶講」で信者に「異宗の奇特説聞せ候」という。また、プティジャンが1865年に天地創造、アダムの堕落、ノアの方舟などを信者に説明する度に、信者はいつも「はい、私たちの家庭では、同じことを聞かされております。少しも違ひませぬ」と叫ぶという（長崎純心大学長崎学研究所編 2015:85）。信者が知っていたというこれらの故事の源泉は、『天地始之事』に他ならない。

その過程で、B系統に見られるように、かくれキリシタンは古い記述を書き改め、新たな伝承を書き入れており、信仰伝承を補完しようとした。その付加を示す典型的な事例は、本稿 2.2 で検討したサン・ジワン伝説である。B系統の伝本 7、10 に限って見られる、妊娠を夫に知らせない罪と三十三のミサの功德をめぐる^⑩もかくれキリシタンによる付加であろうと思われるが、紙幅の制限により、今後の検討に委ねたい。

その一方、かくれキリシタンの信仰実践の場では、『天地始之事』が用いられなくなった現象が起きたようである。カトリックのミサでは聖書が朗読されるが、田北による 1930 年代の調査を見れば、かくれキリシタンの行事ではオラショを唱えることが中心で、『天地始之事』

を読んで講じる事例が見られず、指導者がかくれキリシタンの制度や仕来りなどを説明する際に同書を用いた事例のみが確認できる（1954:64,69）。宮崎による 1985 年以降の調査もあり、やはり同書を語り聞かせることはないのである（宮崎 2001,2014,2018）。

この現象は、かくれキリシタン信仰における『天地始之事』のあり様から解釈できるかもしれない。『天地始之事』はかくれキリシタンの信仰実践に直接に現れないが、田北が報告した事例のように、かくれキリシタンの行事、祝日、制度などを意味づけるものである。つまり、かくれキリシタン信仰の深層には『天地始之事』があり、信仰の表象を支えているのである。時代が下がると、かくれキリシタン信仰は「儀礼中心」の傾向が強まる。宮崎によれば、かくれキリシタンは行事や祈りの意味を知らないが、それを先祖が命がけで守ってきたものとして受け継いで行い続ける（2014:172-5）。それらの行事や祈りの多くは、『天地始之事』に由来し、『天地始之事』によって意味付けられる。

たとえば、長崎のかくれキリシタンは死者を埋葬する際に「土、水、^(マツ)日、風、塩、油、六つで作った五体のもとの土に返すべき」と三回唱え、外海のかくれキリシタンも類似した祈りを唱える（宮崎 2001:250,268）。これは明らかに『天地始之事』の神が人間を創造する段を踏まえたものである。この箇所は、A 系統では「土、水、火、風、塩、油、御自身の御骨肉を御入、（中略）これ則人間の五体也」となっている。B 系統では「土を一升取りて、コロテルに上がらせ給ふ。

水にて浸し、塩、油、すぐちみすちの塩あんばい、仏の力でこねたて」となっており、人間の頭、手、骨などを作る「工程」も詳しく論じられている。

4. まとめと今後の課題

以上、伝本調査をもとにした諸本の分析を中心に、『天地始之事』を再検討してきた。

『天地始之事』の説話の多くは17世紀半ば以前に日本に伝わったもので、一定の期間を経て一つの大きな救済神話と整理され、文字化された。この期間については、先行研究の見解が分かれている。今回の考察でも明確な答えを見出せず、判断を保留せざるを得ない。

本書の写本が成立する前にも、成立した後にも、信仰の指導者や一部の信者によって口承・書承されてきており、その内容は集会における講釈によって一般信者にも共有されていたと思われる。潜伏キリシタンからかくれキリシタンへと継承されていく過程で、かくれキリシタンは自主的に物語の付加を行い、『天地始之事』によって表された信仰世界をより豊かにしている。その付加は、一部の写本に反映されている。

しかし、近代以降、『天地始之事』とかくれ

このように、『天地始之事』はかくれキリシタンの生活から遠ざかるが、それに由来する祈りの文言などは今もかくれキリシタンの行事の場で役割を果たし続けている。

キリシタンとの分離という現象が見られる。この現象が起きた要因については、かくれキリシタンの信仰生活における本書のあり様と、かくれキリシタン信仰の儀礼中心主義が考えられる。『天地始之事』に由来する祈りや行事、制度はかくれキリシタンによって続けられているが、本書自体はかくれキリシタンの信仰生活の背景に退いていたのである。

『天地始之事』はやがてキリシタンと日本の仏教、神道、民間信仰との融合を通して作り上げられた、かつての潜伏キリシタン・かくれキリシタンの信仰を伝える媒体となるが、本書について検討すべき事項はまだ多く残されている。諸本の地理的な関係性、諸本に關係する人や情報の流動、全文に対する繊細な分析を通して、本書の性格、本質と価値を更に明確にすることを今後の課題としたい。

謝辞

資料閲覧を許可して下さった天理大学附属図書館および上智大学中央図書館キリシタン文庫に感謝いたします。また、原稿執筆に当たり、立教大学名誉教授・小峯和明先生にご教示いただきました。記して御礼申し上げます。

註

¹ この稿本の写しは「浦上キリシタン資料」に所収されており、表紙に「尊きの物語 天地の始まるの事」と書かれている（カトリック浦上教会歴史委員会編 2019:51）。

² 田北は、伝本1を「善本」、伝本6を「一代記」、伝本8を「助爺本」、伝本10を「源衛門本」、伝本11を「久市本」と命名した。

- ³ 田北（1954:76）では「久松久右エ門」とするが、小島（1966:41）によって訂正した。
- ⁴ 伝本1の請求記号は198.2//171//2および198.2//1057で、伝本2の請求記号は198.2//171//1および198.2//1059である。それぞれ二つの複製写真版がある。
- ⁵ 伝本2の写真帳（198.2//171//1）に貼られた1941年作成の書誌情報カードに原本所在は「本館 田北耕也氏」と書かれているが、「原本欠 見当らず」との紙片も挟まれている。なお、同じ伝本2の写真帳（198.2//1059）に貼り付けられた紙片によれば、同館の2007年の調査で原本未所蔵が判明したとのことである。
- ⁶ 上智大学キリシタン文庫には伝本1、6、7、10、11、12の複製写真が所蔵されている。それぞれの請求記号は、KBs181:Te35:1（伝本1）、KBs181:Te35:6（伝本6）、KBs181:Te35:4（伝本7）、KBs181:Te35:2（伝本10）、KBs181:Te35:3（伝本11）、KBs181:Te35:5（伝本12）である。注意すべきは、伝本10、11の写真帳に重複するページや、重複するページが異なるところに綴じられた錯簡の箇所があったことである。また、伝本7は上智大学図書館蔵書検索システムでは「松尾典太写」となっているが、「松尾典（与）太」とあるべきである。
- ⁷ 高崎恵（1999:32）は「土井は「天地始之事」と「こんちりさんのりやく」に共通する表記表現に注目し、両書を同時代、つまり17世紀初頭の成立と推定している〔土井1970〕」とするが、その提示した文献を見れば、土井は両書に共通する特殊な表記表現について略述しているのみである。

参考文献

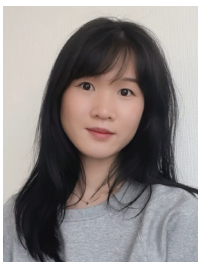
<使用テキスト>

『天地始之事』伝本1・2＝天理図書館蔵本複製写真（注4参照）、伝本1・6・7・10・11・12＝上智大学キリシタン文庫蔵複製写真（注6参照）、伝本5＝「肥前国浦上村百姓共異宗信仰いたし候一件の儀に付申上候書付」＝谷川健一他編『民間宗教』三一書房、1972年。

<研究文献>

- Bohner, Alfred, 1938, “*Tenchi Hajimari no Koto*,” *Monumenta Nipponica*, 1(2): 465-514.
- 土井忠生, 1970, 「「こんちりさんのりやく」「天地始之事」の言葉遣について」海老沢有道他校註『キリシタン書・排耶書』岩波書店, 510-2.
- 石田昌久他, 2019, 「キリシタンに導かれて 田北耕也氏のこと」『南山大学図書館カトリック文庫通信』34:2-12.
- 紙谷威広, 1986, 『キリシタンの神話的世界』東京堂出版.
- 片岡弥吉, 1967, 『かくれキリシタン』日本放送出版協会.
- 片岡弥吉, 1972, 「天地始之事解題」谷川健一他編前掲書, 1001-2.
- カトリック浦上教会歴史委員会編, 2019, 『浦上キリシタン資料』里文出版.
- 児島康子, 2018, 「外海のキリシタン世界」松川隆治他編『天地始まりの聖地』批評社, 53-76.
- 小島幸枝, 1966, 「天地始之事について」『計量国語学』37:40-3.
- 小島幸枝, 1967, 「天地始之事の外来語」『計量国語学』40:1-16.
- 小島幸枝, 1969, 「天地始之事の語彙の周辺」『キリシタン文化研究会会報』11(2-3):72-80.
- Laures, Johannes, 1957, *Kirishitan Bunko*, Tokyo: Sophia University.
- 宮崎賢太郎, 1996, 「『天地始之事』にみる潜伏キリシタンの救済観」『宗教研究』308:73-96.
- 宮崎賢太郎, 2001, 『カクレキリシタン』長崎新聞社.
- 宮崎賢太郎, 2014, 『カクレキリシタンの実像』吉川弘文館.
- 宮崎賢太郎, 2018, 『潜伏キリシタンは何を信じていたのか』角川書店.
- ムンシ・ロジェ・ヴァンジラ, 2012, 『村上茂の伝記』聖母の騎士社.
- 長崎純心大学長崎学研究所編, 2015, 『1865年プティジャン書簡』長崎純心大学長崎学研究所.
- 中村博武, 2000, 『宣教と受容』思文閣出版.
- 西田奈都, 2018, 「なぜ「天地始之事」は伝えられたのか」松川隆治他編前掲書, 77-92.
- 岡田章雄, 1984, 「キリシタン」『国史大辞典第4巻』吉川弘文館, 427-8.
- 岡美徳子, 2014, 「長崎外海のカクレキリシタン信仰に見る托鉢修道会の布教活動」杉本良男編『キリスト教文明とナショナリズム』風響社, 81-105.
- 大石一久, 2018, 「外海の潜伏キリシタン墓」松川隆治他編前掲書, 182-226.
- 田北耕也, 1954, 『昭和時代の潜伏キリシタン』日本学術振興会.
- 田北耕也, 1959, 「キリスト教と民俗」原田敏明編『民俗と信仰』平凡社, 393-406.

- 田北耕也,1968,「天理図書館所蔵の潜伏キリシタン資料を周って」『ビブリア』39:33-40.
- 田北耕也,1970,「天地始之事」海老沢有道他校註前掲書,631-4.
- 高崎恵,1999,『自己像の選択:五島カクレキリシタンの集団改宗』ICU 比較文化研究会.
- Turnbull, Stephen, 1996, "Acculturation Among the Kakure Kirishitan," John Breen and Mark Williams eds., *Japan and Christianity*, London: Macmillan Press, 63-74.
- 浦川和三郎, [1927] 1979,『切支丹の復活』国書刊行会.
- 吉松祐一編, [1972] 1976,『長崎の民話』未来社.
- 結城了悟,1994,「天地はじまりの本」『長崎談叢』81:1-26.



呂 雅瓊 (ろ・がけい)

[専門] キリシタン文学・反キリシタン文学

[主たる著書・論文]

「キリシタン文献における「自由」——古狂言台本・漢訳キリスト教書との比較を視野に入れて」(『日本宗教文化史研究』第27巻第1号、通巻第53号)

[所属] 東京大学大学院学際情報学府博士課程

[所属学会] 日本宗教文化史学会、説話文学会

Senpuku and Kakure Kirishitan's Book of Faith: Manuscript Investigation and Reexamination of *Tenchi Hajimari no Koto*

Yaqiong Lyu*

This paper focuses on the sacred book of faith held by Senpuku Kirishitan (Japanese people who converted to Christianity as a result of the Catholic mission in the premodern Japan and persisted in this belief during 1644-1865) and later on Kakure Kirishitan (Japanese people who continued the Senpuku Kirishitan belief after 1865), "*Tenchi hajimari no koto*".

Interweaving biblical stories with Japanese folklore, this marvelous text has already inspired over 40 studies and translations in multiple languages ever since it was introduced in the 1930s. However, fundamental study on the manuscripts has been lacking since the 1970s, and questions about the formation and circulation of this book are still awaiting to be answered. This gap in research could potentially lead to the dangerous oversimplification of complex Christian beliefs in Japan.

This paper addresses the aforementioned issues by conducting investigations at Tenri Central Library and Kirishitan Bunko of Sophia University, building upon the findings of previous research. As a result of the investigations, there are at least fifteen manuscripts in existence at this point. After a scrutinization of the eight accessible manuscripts, the author divided the manuscripts into two groups according to the content and narratives. Based on the classification, this paper traces how *Tenchi hajimari no koto* was passed on and used in Senpuku Kirishitan and Kakure Kirishitan communities, although the question about the composition of this book remains unsolved.

Though most of this book's manuscripts were kept by leaders of the faith, the legends inside this book reached the majority of followers through the storytelling at religious gatherings. However, when it comes to the era of Kakure Kirishitan, although the prayers derived from this sacred book are still cited by the believers, it seems the book itself was detached from the believers. This book ceased to function as the sacred book of faith and transformed into a time capsule that preserves the Christian belief in pre-modern Japan.

* Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, the University of Tokyo

Key Words : Senpuku Kirishitan, Kakure Kirishitan, Christianity, *Tenchi hajimari no koto*, Nagasaki, Bible.